

プロメテウス解剖学アトラス 胸部/腹部・骨盤部 第3版

坂井建雄, 大谷 修 ● 監訳

〔評者〕池上浩司(広島大学教授・解剖学及び発生生物学)

『プロメテウス解剖学アトラス』の『胸部/腹部・骨盤部』は初版が2008年、第2版が2015年の発行であり、初刊行から12年、第2版から5年の歳月を経ての改訂である。『解剖学総論/運動器系』『頭頸部/神経解剖』がそれぞれ2017年、2019年に第3版に改訂され、残るはこの1冊のみと待ちに待った待望の改訂版である。他の巻と合わせて3巻で1500ページ、他の解剖学アトラスの2倍以上と、圧倒的情報量を誇る邦訳プロメテウスの第3版(原書第4版)がここによりやく完成した。

本書の特徴の第一は初版から続く圧倒的美しさのイラストであろう。人体はある種の芸術作品であると感じることが多いが、本書の図はそれをさらに強く感じさせてくれる。爽やかさすら感じさせるイラストは、勉強というよりも写真集を眺めるように学ぶことを可能にしてくれる。他のアトラスの2倍を超えるページ数故に可能となる、詳細な、それでいて簡潔な説明の数々はもはや「アトラスを超えた読み物」とも言えよう。とりわけ心電図の解剖生理学的解説、疾患例のみならず診察や治療術の例示、各種読影法などの臨床医学的内容は、解剖学を学ぶ低学年学生にとっては学びの目的を明確にし、臨床を学ぶ高学年学生や研修医にとっては臨床で遭遇するさまざまな問題の本質的理解の助

けになるはずである。

これらに加えて本書では発生学の記載も豊富であり、その充実ぶりは特に完成した構造だけでは理解しづらい心臓のねじれ、消化管の配置や腹膜腔の複雑さ、女性と男性で異なる骨盤腔内外の構造などをその形成過程と併せて学べる「四次元アトラス」である。また初版から続いている本書の独自性の一つとして、腹部と骨盤部を分けて一連の領域として扱っている点が非常に興味深い。これは解剖を行ったことがある者なら誰しもわかるであろうが、腹腔と骨盤腔には構造的な境界は存在せず、そこに収まる臓器は一続きであるように、非常に「make sense!」な分け方と言える。プロメテウスの著者らの哲学を感じる。

さて第3版ならではの改訂について少し触れてみたい。冒頭の概観と発生学の章に血液の項が新たに加わった。これにより学習者が循環器系から呼吸器系までをシームレスに学べるようになった点は大きい。各臓器に目を向けると、骨盤底周囲のイラストが大幅に刷新されている。骨盤部の理解は学生にとって最も難しく、刷新および追加されたイラスト群はその難しい骨盤部の層構造を非常にわかりやすく見せてくれている。腹部においては腹大動脈から出る無対の三動脈の枝に関する大きなイラストが追加され、それぞれの血管

